

出張報告書

平成28年8月16日

市議会議長 様

会 派 名 公明党

代表者氏名 友永 修

下記のとおり報告します。

記

- 1 目 的 競輪場を活用したインバウンドの取り組みについて
- 2 出 張 先 愛知県豊橋市
- 3 出張期間 平成28年4月28日～平成28年4月28日
- 4 出張者氏名 松本妙子、米田貴志、岩崎雅秋、桑原佳一
友永 修
- 5 てん末報告 別紙参照

今回、インバウンドの新たな取り組みとして考えていた競輪事業の活用について、先進的に取り組みをしている豊橋市に伺い、その状況について視察をさせて頂こうと訪問。その内容について所管とともに報告いたします。

まず、なぜ競輪事業を活用しようと考えたのかについて説明すると、ご存知の通り、最近の競輪ファン層の高齢化、そして新たなファン層の拡大への苦戦。特に若者層の取り込みの鈍化が堅調になりつつあるなか、有効な手段で安定した車券の売り上げと、新たな発想をもとに車券販売と共に、市の活性化に貢献できる方法が見いだせないかとの思いからである。

現在、競輪場は、競輪ファン専用の施設で、これまで比較的、市民が親しみ辛く、どちらかといえば閉鎖的なイメージがあり、そこから脱却を図りえる方法が時流と共に必要になってきているのではないかと考えられるからである。

昭和25年から公営競技として開業しこれまで一般会計に600億円を超える繰り出しを行ってきた事実は、市民の誰もが知りえるところであり、よく言われる岸和田市内の下水道事業の推進に大きく寄与し、今では市内の93.4%をもカバーするに至っている。

もちろんこれだけではなく、他にも市民の福祉向上に大きく寄与してきている事は当然の事であり、まさに岸和田の宝である。しかし、冒頭に記載した通り、ファン層の高齢化、新たなファン層の拡大に苦戦を強いられているため、その売り上げがG-1クラスのレースを展開しないと黒字にならず、F-1、F-2ではレースを開催するたびに赤字になっている事はご存知の通りで、現在はミッドナイト競輪の展開で売り上げの向上と新たなファン層の拡大を図っているところである。

そんな中、「競輪＝ギャンブル」としてだけのイメージではなく、自転車競技として、スポーツの一つとしての目線を大きく取り入れ、新たなファン層を拡大し、車券販売による貢献に加えて自転車と言うコンテンツをベースに「交流人口の拡大」の新たな核として活用していく方法を模索するべきではないか、その様な展開を考えることで、岸和田の宝として新たな輝きを放つのではないか、また、その様な価値創造をしていく事が我々議員の役目ではないかと考えるからである。

その中の一つとして、今回我々が着目したのは、競輪事業を活用したインバウンドへの取り組みである。その様な調査項目として赴いた豊橋市での視察させて頂いた内容を記していく。

今回の視察において、多忙な中、意見交換の場に同席して頂いたのは以下の通り。

豊橋市産業部観光振興課 課長 間嶋康之 氏
同 主査 坂口錦也 氏

豊橋市産業部競輪事務所 所長補佐 中神俊宏 氏

愛知県東三河広域観光協議会 事務局長 兼

豊橋観光コンベンション協会 事業推進部長 熊木将人 氏

さて、訪問させて頂いた豊橋市における外国人観光客の状況は、極めて増加傾向にあるとの事で、最近、日本政府が訪日外国人の取り込みの目標値を改めた事を裏付けるがごとく豊橋市は増加している様である。政府はその目標値を2020年に4000万人、2030年には6000万人と大幅に修正をした。これは近年の訪日外国人が増えていることを受けての事かと思われるが、実は豊橋市でも同様に実感している様であり、実際に豊橋市内の外国人による宿泊者数も増加傾向。2011年の外国人宿泊者数は33,516人であったが2014年には140,904人となって急激に増えている。最新の情報によると、H27年度では155,543人と昨年を上回り、さらに言えば協会非加盟の宿泊施設の宿泊者を含めると179,543人となる。豊橋市の人口は平成27年4月1日で、男女合わせて377,962人であり、実に人口の50%にあたる外国人観光客が宿泊していることになる。2011年からの4年間で約5倍の大きな伸びが確認されているとのことである。

その要因としては、豊橋市の地理的な条件が大きく、東京と大阪をつなぐ中間地点に位置している。いわゆるゴールデンルートの間であり、東京イン大阪（京都等訪れ）アウト、また大阪イン東京アウトの宿泊に適した位置にあり。宿泊に好都合な位置と言う地理的な有利さが呼び込んでいる。しかし、それだけでは喜べないようである。宿泊数は増えているが、滞在をして頂いていないと言うのが現状のようである。それは観光目的ではなく宿泊目的と言う事である。ただ宿泊者数は名古屋、常滑に次いで3番目に多い。その内訳は、圧倒的に中国の方々が多く、ツアー旅行の方が9割、個人旅行者が1割である。驚くのはその数字である。全国的にみるとツアー客と個人旅行者の比率が逆であり、全国的にはツアー客が3割で個人が7割、なおかつ個人旅行者が増えてきている状況にある。その様な中で豊橋市ではツアー客の方が多いことが特徴ともいえる。これらツアー客の行動動態を見ると日中は他府県、他市を観光し、夜遅く豊橋市に入る、そして翌朝、早くに出発していくと言うパターンが殆どで、豊橋市での滞在時間が殆ど無く、結果、経済面での大きな活性化にあまり繋がっていないようである。要は観光でお金が豊橋市にあまり落ちていない実感があるのではないのである。

岸和田市に置き換えてみるとどうであろうか、日本の西の玄関口である関西国際空港から鉄道や車で30分以内に位置していながら、関空から岸和田へと訪れる外国人の方は、関空に降り立つ外国人観光客の人数から比率で見ると皆無と言えれば言い過ぎだろうか。また宿泊施設も少なく、9月祭礼、10月祭礼以

外には外国人観光客の足を止め、呼び込む手段すらないのが現状ではないだろうか。しかも関空と大阪市内をつなぐ鉄道の停車駅が、山手、浜手にありながら、外国からのお客様は“通過”するばかりである。言うまでもないが、関空から帰国される方が立ち寄る事も皆無と言っても過言にならないのが現状ではないだろうか。いわゆる「トランジット」としても取り込まれていないのが現状である。そう考えると本市は豊橋市と比べるとさらに厳しい状況におかれている事がわかる。

その様な中、豊橋市はその現状を踏まえて、行政だけでは対応が遅れるであろうと昨年、豊橋インバウンド研究会と言うものを立ち上げた。これは受け入れを促進するための情報共有を行い、受け入れ環境の整備を図る事を目的に立ち上げた。構成メンバーは以下の通りである。

・豊橋市（観光振興課、商工業振興課、シティープロモーション推進課、まちなか活性課）・豊橋商工会議所観光サービス業部会・交通事業者・タクシー事業者・大規模店舗事業者・日本政策金融公庫・穂の国ホテル連絡会幹事者・平成25年度緊急雇用事業受託者。そして事務局は豊橋観光コンベンション協会である。

では実際に、これまで豊橋市が、取り組んできたインバウンドに繋げる招聘ツアーとは、どの様なものなのかと言うと、毎年9月の上旬に行う「炎の祭典」と言うものがあり、これは豊橋市がもともと首都圏や大阪など関西からお客さんをお呼び込みたいとの思いから始めたイベントで、手筒花火をメインにしたお祭りで、これをベースにして外国人の誘客に繋げるためのプランニングを研究会で行い、海外の旅行会社の方をお招きして外国人の取り込み、インバウンドに努めていくと言う姿勢を直接打ち出した取り組みである。

では、本市では、インバウンドに対してどの様な取り組みがなされてきたのか、もちろん何もしていないわけではない。新関西国際空港(株)と泉州の9市4町からなる泉州観光推進プロモーションが平成26年度に立ち上がり、SNSなどでの発信力のある海外の強力なブロガーや、メディア関係者、旅行雑誌社を招いたファムトリップや台湾でのPR活動などを展開している。しかしながら、これは9市4町によるもので、豊橋市が設置したインバウンド研究会の様に、岸和田市独自のインバウンド部会ではない。

さて、豊橋市の取り組んだ内容であるが、平成26年から始めており、この年は9月13・14日の一泊二日。翌27年は9月12・13日の一泊二日でそれぞれ行っている。

平成27年度開催分を取り上げると、参加者は12名でエージェントが11社、メディアが1社で、東京から8名、大阪から2名、横浜から1名の参加である。付け加えると、平成26年に最初に招聘したツアーには中国対応のエージェン

ト及び役員クラスであったが平成27年に招聘したのは、役員ではなく企画・営業の実務担当者に的を絞って招聘してるとの事である。行程は以下の通りである。

【初日】

大阪・東京・横浜から豊橋駅に集合※10:10出発

↓

☆愛知県大学記念館の見学

孫文にかかわる資料が残っているので中国（上海）からも見学に来られる。また、この事で台湾との繋がりにもなっている。

↓

☆のんほいパーク・トラットリア チェントロ（パーク内展望塔レストラン）

地産地消のランチ

↓

☆自然史博物館の見学

動物園と植物園の併設であり人気あり。また、福井県にも引けを取らない

本物の恐竜の化石（骨）を展示。

↓

☆二川宿本陣資料館見学（駒屋含む）

本陣として東海道に残っているのは滋賀県の草津宿と、ここ豊橋市の二川宿だけである。着物の着付けもできる等、日本の歴史と伝統や文化を知って頂ける。

↓

☆吉田城址 鉄櫓前広場及び三の丸会館

手筒花火の説明と特別放揚会場と手筒の見学。

↓

☆炎の祭典見学（夕食:弁当）

↓

ホテルアソシア豊橋着（一人1一室） 21:30着

【二日目】

☆ホテルアソシア豊橋発 8:00

↓

☆豊川稲荷前 ヤマサちくわ本店

ちくわ作り体験と試食

↓

☆イトーヨーカ堂免税店視察

休憩を兼ねて、免税品の紹介。

↓

☆きく宗本店

昼食<名物である菜めし田楽定食>と競輪の車券の購入のレクチャー

↓

豊橋競輪（模擬レース）13:30～14:30

岐阜競輪の場外車券を実際に購入。20倍を当てた方も！また、選手会による模擬レースでの車券購入やバンクの見学。選手とのふれあい。

↓（路面電車にて移動）

ほの国百貨店（化粧品免税店）

↓

ホテルアソシア豊橋（意見交換会16:00～18:00）

↓

豊橋駅 18:30 ここから大阪、東京、横浜へ帰路につかれる

ご覧いただくと、今回の目的である競輪事業を活用したインバウンドは、この行程のワンピースである。要は豊橋市ならではの観光スポットをつなぎ、その中に取り入れたのである。招聘コースは、大まかに申し上げますと、やはり日本の伝統とその地の文化に触れて頂き、また体験して頂き、特産品を食べてもらうと言う、どの地に赴いてもおおよそ同じような流れであろうかと思える。しかしながら、これまでにないものは、やはり競輪ではないだろうか。

豊橋競輪も全国の競輪場と同様に、ファン層の高齢化、そして新たなファン層の拡大に苦戦を強いられている。また岸和田の施設と同様に老朽化してきている施設の更新に悩みを抱えている。昭和24年から営業が開始され歴史的にも古い競輪場なので、そこを逆転の発想で、昭和レトロと言う事で、レトロ感のイメージで売っているとの事も仰っておられたが、言い換えれば施設の更新に苦労している証拠でもあろうかと推察される。

実は豊橋競輪では平成14年には事業の危機意識が大変に強くならざるを得ない状況であったようである。それ以降選手会も協力して豊橋競輪を盛り上げるため、これまで以上に協力を惜しまなかった。その年を契機に、それから後は13年連続で黒字に転換している。選手会の皆さんの意識は、極端に言うと、どなたでも、どちらの国の方でもとにかく競輪場に来て頂いて、車券を買って頂いて、競輪を好きになって頂いて、自転車が好きになって頂くというところから始めないといけないという強い意識が継続しており、選手会の皆様も喜んで協力をして頂いている様である。

また豊橋競輪を取り巻くロケーションを見ると近隣に有数で施設の綺麗な公営競技場がある。公営競技場の所長補佐の中神さん曰く「実はこの辺りは大袈裟に言うとギャンブル地帯なんです」と。豊橋市の20km東には浜名湖競艇、20km西には蒲郡競艇。因みに蒲郡競艇は先日競艇界で最高の販売額が出たようである。その額が約990億円。また一昨年は全面改修を行い、綺麗な競艇場になったようである。浜名湖も有数な綺麗な競艇場。そして愛知県にはもう一つ常滑ボート。三重には津ボート。愛知県内で言えば、名古屋競輪場、名古屋競馬、中京競馬、岐阜に行くと岐阜競輪、大垣競輪、三重には四日市競輪、松坂競輪と本当に数々の公営競技があるなかで、豊橋競輪を選んでもらう事に、非常に苦戦を強いられている。その様な中で、やはり改善策として施設整備計画を作って、少しでも周辺の住民の方にも利用してもらえる「明るい競輪場」と言った部分も取り入れた施設に改修していく事も今の大きな課題であるようだ。

その様な状況におかれた豊橋競輪場は、観光コンベンション協会からインバウンドへの取り組みの中で、競輪場をプログラムの一つとして紹介したいと要請を受け、応じた様である。

競輪場としても「新たなお客様の獲得」との狙いが共通項になりえることであり、中神所長補佐は「その手に乗らない事はない」と、一生懸命考えてプログラムを考案したようである。ではどの様な内容でまとめたかと言うと、平成27年のツアー時は岐阜競輪さんの場外発売を活用し車券購入も体験。（※なんと20倍の当たり車券が出たとの事で大いに盛り上がった。）加えて実際に競輪選手が走る状況、いわゆる模擬レースの展開。そしてバンクを実際に歩いてもらい、選手とのふれあいタイムも。この様な部分は競輪場の職員だけでは対応できず、競輪自体の魅力も伝えきれない。職員だけでは施設案内が関の山。このことからインバウンドに取り組むには選手会の協力が非常に大きいと考えられる。実際に参加された招聘ツアーの皆様から、そのスピードと迫りに感動されたアンケート結果が得られている。

また、同年の11月に展開した招聘ツアー。これは経産省の補助事業である『海外人材活用地域資源魅力発掘事業』を活用したもので、一般財団法人海外産業人材育成協会（HIDA）タイムメディア関係者招聘ツアーでも同様に競輪場をツアーのプログラムに。この時の参加者はタイの方が9名（国営放送テレビ局1名、同ラジオ局2名、民間テレビ局MGR 1名・MC 1名、カメラマン1名、雑誌社1名、旅行社2名）参加された方々のアンケートには「スポーツに特に興味のある人に向いている」「観光シーズンに合わせて企画するべきである」「タイ人好みだ。セールスポイントにできる」「非常に興味深いプログラムだ。今タイは自転車ブームなので時流に合っている。タイ人は運試しも好きなので非常に興味深いプログラムになるだろう。一つの選択肢として旅程に組み込む

べき」等々の意見が寄せられている。この様な取り組みを通して得た評価も良い事から一定の方向性が見えてきている様である。中神所長補佐も「インバウンドに関して、今後も積極的に招致して、今後も競輪場のコースに入れてもらって、(宿泊外国人の方が)どこか1~2時間、どこか行くよと言うなら競輪場にも行けますね!と言った具合に進めたい。豊橋競輪では走ることはありませんが、夜のナイター発売も今後は積極的に展開して、宿泊されるお客様にも夜8時半くらいまでならこれますよ!と言うような状況も整備していきたいと考えている。」と述べておられた事が印象的であった。と同時に本市においても重要なキーワードではないだろうか。

また、今回の招聘ツアーは100万円の予算で豊橋市が組んだ。そして市の観光課はこれらの結果から一定の手ごたえを感じている様である。観光課長は「これで競輪ファンが増えてくれるなら有難い。大歓迎である。そしてこれが一つのコンテンツになりえると思っている。実際にアンケートを見て頂いた通り、興味を持って頂いたと言う事がわかったものですから、ここからかなと期待している。」との事であった。と言う事はインバウンドに競輪と言うコンテンツを織り込むことによって、市内の交流人口の増と競輪場の新たなファン層の獲得のきっかけになればと考えている様である。そして「市としては、これでやっていますが、実は愛知県の観光協会も両方の業者を呼んでの招聘ツアーを行っているので、そういったところにもメニューとして使って欲しいと要望し、取り入れてもらいたい。そしてとにかく今は機会を増やすことが必要と考える。」とも述べておられた。これは、まだ明確に商品化されてはいないが、インバウンドの商品として、それも豊橋のならではの商品としての目指せるとの考えがある事に繋がっているのではないかと推察される。また確立させることによって、愛知県に来られる外国人観光客を豊橋市に呼び込めることにも繋がれると観光課は考えての事ではないだろうか。

今回、招聘したエージェントとのセッションはやはり観光コンベンション協会がメインである。構成されている方々は市の出向の方はもちろんの事、中部ガス、豊橋鉄道、JTB、等々であり、そのルートに長けている方々で構成されている。

これは、豊橋市にとってインバウンドに取り組むための大きな機動部隊になっている。

そして豊橋市はインバウンドに対しては、かなり積極的であり、まだまだ伸ばすために近日の目途を定めている。それは2020年の東京オリンピック・パラリンピックである。全国的に個人旅行客が7割の中、豊橋市では1割と言う事で、まだまだ伸びてくると考えているようであり、特に台湾等ASEAN諸国の方々がツアーで来日され、ビザの緩和、円安の要因も含めて、次は個人で来訪

されると予想している。その個人観光客の取り込みを課題としている。また、一方でツアー客の宿泊は、ゴールデンルートの中央に位置する事を考えるとまだまだ残ると想定しており。そのツアー客の滞在時間を延長するためのモデル作りが不可欠と考え、そのための観光資源のブラッシュアップに取り組み、ショートトリップに繋がりたいと考えている様である。

今回の視察を通して、考えさせられることは、広域でインバウンドに取り組むにあたって、その地域ならではの要素をブラッシュアップする必要性を大きく感じた。核となるものを持つ重要性。広域観光をリードできる要素を持つことの重要性である。そう考えると岸和田市ならではの施設だんじり会館もさることながら、豊橋同様に岸和田競輪も、十分にそのコンテンツになりえると言う事である。公営競技として、そして自転車競技として、さらに言えば、全国の競輪場でBMXコースが併設されているのは本市だけである。これらをさらに前面に押し出して外国人観光客のみならず国内旅行者の取り込みにも繋がられる可能性が高くなるのではないだろうか。また風呂敷を広げた言い方になるかも知れないが、堺を含めた泉州とサイクルスポーツセンターのある河内と連携させた自転車レースも展開できるのではないか。この視察で、岸和田市が自転車競技の中心拠点となりえる可能性を感じさせてもらえることができた。その可能性を探りながらさらに調査研究を進めてまいりたい。

なお、泉州観光推進プロモーションのスケジュールを考えると、現在は初動期（H26～27）を終えて、拡充期（H28～H31）の初年度である。岸和田にとっても重要な年度に入っている。この期は泉州を訪問し、その魅力を発見、体感してもらう期間である。

そしてH32年、この年は東京五輪が開催される年である。海外からのお客様が一つのピークを迎えるときである。この年が成熟期の初年度である。そして五輪の翌年には関西ワールドマスタース2021が開かれる。大変に重要な初年度、H32年のこの時までには岸和田をどのように仕上げるのか、それらの課題をさらに加速させて結果を出さなければならない事の重要性をも感じさせられた視察となった。